

パリはゴミの山

パリの街角は至るところゴミの山ができています。3月に入ってもう十日近くゴミ回収がない。ゴミ回収業者とゴミ焼却所ストライキの結果だ。フランスの年金改正案反対のデモやストライキが始まってそろそろ3ヶ月が経つ。

パリは毎日ゴミ回収トラックが周っている。グリーンのごみ箱が生ゴミと燃えるゴミ、黄色いごみ箱が再生可能なプラスチック容器、段ボール、紙。日本のように細かい分別はなく、いつでもゴミを出すことができるのは楽だ。粗大ゴミは市の衛生課に電話すれば無料で回収してくれる。ビンは街中にある大きな球形の専用回収箱に持っていく。電池、電球、小型電化製品は近くのスーパーやコンビニに専用の回収場所が設けてある。ゴミ処理に関してはパリは便利で困ることはまずない。

15日は上院で年金改正案投票の日で、8回目の年金改正案反対のデモ行進がパリ市内で行われた。ゴミの山に放火されないか、行進の妨げにならないか、治安を問うパリ市民の不満も表面化してきた。ゴミ処理の責任はパリ市長アンヌ・イダルゴにあるが、ストライキの権利を尊重し支持するとの表明を出しゴミ回収されないままである。



パリ市の記者会見によればパリ一日のゴミの量は3千トン。十日間放置されているので3万トンがパリの歩道を埋めている計算になる。病院や施設など最低のゴミ回収は行われており、区長の判断で回収を進めているところもあるが、15日現在7000トンのゴミが放置されているそうだ。

7区ラシダ・ダチ区長はパリ市民の生活を保証する義務を遂行できないイダルゴパリ市長を名指しで非難しているが最低20日までは解決の見込みがない。ゴミ騒動は収まらず、パリ市長が回収しないのならと内務大臣ジェラルド・ダルマナンが政府の権限でパリ警察署に回収させると発表した。



世界のブランドを代表するパリ的高级ブティックやメトロの出入り口に黒いゴミ袋が山積では観光イメージダウンである。景観だけにとどまらず、歩道を塞いで通行の安全を妨げる。カラス、ハト、ネズミが集まって不衛生である。真夏で

なく幸いだが、雨が降る度に汚水となり、だんだん汚臭が発生し始め、急遽消毒液を散布する飲食業者も出てきた。

今回の年金改正案は受給年齢を62歳から64歳に引き延ばすことである。ゴミ回収業者、フランス国鉄(SNCF)やメトロ(RATP)の運転手などは特例で57歳で受給資格があり、これを2年延長して59歳にする改正案であるが、既得権をそう簡単に諦めることをしないのがフランス人だ。

人の寿命が長くなり、2年長く働くことも仕方ないことだろうとは考えない。ヨーロッパの他の国々は受給年齢が65歳を超えており、フランスは例外的に早く、それだけ労働組合が強いのだろう。ブルーカラーの職種に付いている人は身体的な疲労、疲弊があることは間違いなく、2年先送りは絶対に反対だ。

仕事に対する考えには個人差があり、自己を充実できる価値を見出す人、仕事は生活手段で自由を拘束される嫌なことと考える人などさまざま。60歳前に定年退職できるという理由でフランス国鉄、長距離トラック運転手を選ぶ若者もいる。自分の好きなことが必ずしも仕事になるとは限らず、年金条件が若い人たちにとっても大きな問題であることに間違いはない。

フランスの年金制度も日本と同じく、基礎年金と厚生年金の二本立てである。働いた期間と掛けた金額で受給額が計算される。満額を受給するためには働いた年数が1963年生まれの人42年間(168 ポイント)、1973年生まれ以降は43年間(172 ポイント)が必要である。4半期(三ヶ月)を1ポイントと計算する。ホワイトカラーで企業経営者や管理職の人たちは老後を楽しく年金で過ごせるが、例え満期働いても年金だけでは生活できない人が増えている。更には去年からのウクライナ戦争に伴うインフレ、エネルギー源の度重なる値上げでアルバイトを余儀なくされる高齢者がクローズアップされている。高齢者就労を始め、年金改正を取り巻く問題は今後も続いていくだろう。(古賀順子記・写真)

年金：3月23日に労働組合が 発表した新しいストライキと デモの日

